『撰真実論』にみる有形象知識論論証成立の背景

松岡寛子

0. ダルマキールティ (Dh) は対象とその知の不異性を「必ず一緒に認識されること」(sahopalambhaniyama) と「認識 [であること]」(samvedana) という二種の根拠に基づいて証明した¹⁾。シャーンタラクシタ (Ś) は『撰真実論』(TS)「外界対象の検討」(Bahirarthaparīkṣā) 章において無形象知識論を批判するためにこれらの有形象知識論論証を援引した後、クマーリラ (Ku) が『シュローカ・ヴァールティカ』(ŚV)「空論」(Śūnyavāda, ŚNV) 章に示した対象とその知の別異性を証明する一連の論証式を論駁する。本稿は、Ku との関連から、Ś が sahopalambhaniyama 論証と samvedana 論証をどのように思想史上位置づけていたのかを明らかにすることを目的とする²⁾。

1. Ku が提示する一連の論証式を ŚV に即して確認しておこう。彼は唯識派に対する批判の一環として、計七種の論証式を以下の通り列挙している。

ŚV ŚNV 172cd-77ab (=TS_B 2063-67): tasmād³⁾ yad grāhakaṃ⁴⁾ rūpe⁵⁾ tadgrāhyāt tasya bhinnatā// tatsamvittāv asaṃvittite rasādigrāhakaṃ yathā/ grāhyaṃ tadgrāhakād bhinnam⁶⁾ tatparāṃṣatā yataḥ // na parāṃṣyate 'vaśyaṃ rasādigrāhakaṃ yathā⁷⁾ / dvayaṃ paraspareṇaiva bhinnam sādhyam rasādivat// aikarūpyeṇa vājñānāt⁸⁾ santānāntarabuddhivat/ jñānam svāṃśam na grhṇāti jñānotpatteḥ svaśaktivat// grāhyatvapratīṣedhaś⁹⁾ ca dvayahīnā hi vāsana¹⁰⁾ / caitrajñānam tadudbhūtajñānāṃśagrāhyabodhakam// jñānatvān na bhaved yadvat tasya dehāntarodbhavam/ それ故、[以下のように証明される。] [論証式 1] [主張] 色の把捉者、それはそれによって把捉されるべき [色] とは異なる。[証因] それ (色) が認識されるときに認識されないから。[喩例] 味等の把捉者のように。[論証式 2] [主張] 把捉されるべき [色] はその把捉者とは異なる。[証因] それ (把捉者) を反省把握する者によって必ずしも反省把握されないから。[喩例] 味等の把捉者のように。[以下の主張が次のように] 証明される。[論証式 3-1] [主張] 二者 (把捉対象と把捉者) はまさしく相互に異なる。[証因] [一方が反省把握されるときに他方は反省把握されないから。]¹¹⁾ [喩例] 味 [と色] 等のように¹²⁾。或いは、[同じ主張が次のように証明される。] [論証式 3-2] [主張] 二者はまさしく相互に異なる。[証因] 同一のものとして認識されないから。[喩例] 他相續と [それを把捉する] 知のように。[論証式 4] [主張] 知は [知] 自身の部分 (svāṃśa)

を把捉しない。〔証因〕知から生じるから。〔喩例〕〔知〕自身の能力のように。更に、〔知が知自身の部分の〕把捉対象であることも〔同じ証因と喩例によって〕否定される。〔即ち、〔論証式5〕〔主張〕知は知自身の部分によって把捉されない。〔証因〕知から生じるから。〔喩例〕知自身の能力のように。〕 実に、習気は二者（把捉対象、把捉者であること）を欠く。〔論証式6〕〔主張〕チャイトラの知はその〔チャイトラ〕に生じた知の部分である把捉対象を認識しない。〔証因〕知であるから。〔喩例〕〔マイトラ等の〕別の身体に生じた〔知〕がそれ（チャイトラに生じた知の部分）を〔認識しない〕ように¹³⁾。

主張に着目して俯瞰すれば、前半の論証式1, 2, 3-1, 3-2と後半の論証式4, 5, 6の性格の違いが看取される。前者は把捉対象と把捉者が相互に異なることの証明であり、後者は知が知自身の部分を認識することの否定である。

1.1. 次に、証因に注目して前半の論証式1, 2, 3-1, 3-2を各々検討しよう。論証式1では、把捉者が把捉対象から区別されることが、把捉対象が単独で認識されることに基づいて証明される。論証式2では把捉対象が把捉者から区別されることが証明される。証因は過去の把捉者である経験が想起されるときに必ずしもその把捉対象である過去の経験対象が想起されないことである。これは「後時に想起されるから」(smṛter uttarakālam PS I 11c')という、ディグナーガ(D)が提示する自己認識の根拠の逸脱例である。論証式3-1では1と2における個々の主張が双方向的にまとめられる。論証式3-2では、3-1と同一の主張に別の証因が与えられる。Kuによれば、同一のものとして認識されないものは相互に異なる。この論証式3-2の導入意図を説明する以下のウンヴェーカ(U)注は注目に値する。

TT 282, 11: abhedasādhakasya sahopalambhasya paroktasya vā sahopalambhaniyamād ity asyāsiddhatām anenāha/ また、「〔青とその知は〕必ず一緒に認識されるから」(PVin I 54a) というように対論者が主張する、〔青とその知が〕異なることを証明する「〔必ず〕一緒に認識されること」というこの〔証因〕が不成因であることを〔師 Ku は〕この〔シュローカ〕(175ab)を通じて述べる。

Uによれば、論証式3-2を通じて、「必ず一緒に認識されること」が不成因であることを指摘し得る。Kuにとって、青とその知が異なるものとして認識されること(bhedopalambhana)¹⁴⁾は確立しているからである。

1.2. 後半の論証式4, 5, 6についても検討しよう。「知が知自身の部分を認識する」という見解は「〔知の〕内部の知られるべき形相」(nang gi shes bya'i ngo bo, antarjñeyarūpa ĀP 6a')を所縁とするDの見解に一致する。論証式4と5では、知が知自身の部分の把捉者でも(主張4)把捉対象でもない(主張5)ことが知が直前の知から生じるに基づいて論証される。論証式6では、知が知自身の部分

(84) 『撰真実論』にみる有形象知識論論証成立の背景 (松 岡)

を認識しないことが知であることに基づいて論証される。乙の知が甲の知の部分を認識しないのと同様、甲の知も甲自身の知の部分を認識しない。

2. 以上の一連の論証式に対する Ś による総合的な批判を検討しよう。

2.1. Ś は前半の論証式 1, 2, 3-1, 3-2 を次の通り纏めて批判する。

TS_B 2068: aprthag vedanāt pūrvam tasyaiva¹⁵⁾ pratipāditāt/ aikarūpyāparijñānaparyanteṣu na siddhatā// 「別々には認識されない」〔という証因〕に基づいて既にその〔青とその知の不異性〕は説明されているから, 「〔把握対象が認識されるときに認識されないから〕から」 「同一のものとして認識されないから」まで〔の証因〕は不成因である。

カマラシーラ (Ka) はこの詩節を次のように引用を交えて解説している。

TSP_B 705, 6: aprthag vedanād iti nīlataddhiyoḥ sahopalambhaniyamāt/ apratyakṣopalambhasya nārthadṛṣṭiḥ prasidhyatīty ataḥ svasamvitprasādhanena pratipāditād abhedasya nīlataddhiyoḥ prasādhitatvād aikarūpyāparijñānaparyantā hetavo na siddhāḥ/ 「別々には認識されない」〔という証因〕に基づいて, 即ち「青とその知が必ず一緒に認識される」(P_{Vin} I 54ab)〔という証因〕に基づいて, 即ち「認識が直接知覚されないときに対象の知覚は確立されない」(P_{Vin} I 54cd) というこのことに基づいて自己認識が証明されることによって〔TS_B 2029-30 で〕既に説明されているから, 即ち青とその知が不異であることは既に証明されているから, 「同一のものとして認識されないから」までの証因は不成因である。

詩節中の「別々には認識されない」とは sahopalambhaniyama の換言である。そして「Y の認識が必然的に X の認識に他ならない」と解される sahopalambhaniyama は,¹⁶⁾ 青の形象とその知の不異性の根拠として以下の通り既に確立している。

TS_B 2029-30: yatsamvedanam eva syād yasya samvedanam dhruvam/ tasmād avyতিরিক্তam tat tato vā na vibhidiate// yathā nīladhiyaḥ svātmā dvitīyo vā yathoḍupah/ nīladhīvedanam cedam nīlākārasya vedanam// [論証式] [遍充関係] Y の認識が必然的に X の認識に他ならないとすれば, Y は X から区別されない。或いは〔逆に〕, X は Y から区別されない。例えば, 青の知自身の本質が〔青の知から区別されることもなければ, 青の知が青の知自身の本質から区別されることもないように〕。或いは, 〔眼病者の知に顕現する〕第二の月が〔第一の月から区別されることもなければ, 第一の月が第二の月から区別されることもないように〕。〔主題所属性〕そして, この青の形象の認識は青の知の認識である。〔結論〕〔よって, 青の形象が青の知から区別されることもなければ, 青の知が青の形象から区別されることもない。〕

したがって, Ś によれば, Dh はこの sahopalambhaniyama 論証を通じて, 青の知が青の認識時に認識されないこと (証因 1), 青が必ずしも青の経験の想起時に想起されないこと (証因 2), 青とその知が異なるものとして認識されること (証因 3-2) が何れも不成因であることを指摘している。

2. 2. Ś は後半の論証式 4, 5, 6 についても次の通り纏めて批判する。

TS_B 2077: kambupitādivijñānair hetvoḥ paścimayor api/ anaikāntikatā vyaktaṃ dig eṣānyatra sādhanē// 巻貝に関する黄等の知によって後の二つの証因が何れも不定因であることは明らかである。別の論証に関してもこの〔批判〕方針が当てはまる。

Ka はさらに次のように解説している。

TSP_B 708, 5: tathā hi—yathā¹⁷⁾ yadi pīṭasaṅkhādijñānaṃ jñānotpannam api sat svāmśaṃ pītādyākāraṃ grhṇāti/ yathā ca jñānaṃ api sat jñānāmśasya pītāder grāhyasya bodhakaṃ bhavati/ tathānyad apīti vyabhicāritā hetvoḥ/ 即ち、例えば黄色い巻貝等の知が知から生じるとしても、〔知〕自身の部分である黄等の形象を把握する。更に〔その知が〕知であるとしても、知の部分である黄等の把握対象を認識する。他〔の知〕も同様である。したがって二つの証因には逸脱がある。

知から生じる黄色い巻貝の知は黄等の形象という知自身の部分を把握する。また、知である黄疸患者の知は黄という彼に生じた知自身の部分である把握対象を認識する。このように「知から生じること」(証因 4=5) と「知であること」(証因 6) はいずれも所証を逸脱している。

「他〔の知〕も同様である」という注は錯誤知のみならず正しい知も逸脱例であることを指示する。白い巻貝の知も非黄疸患者の知も知自身の部分を把握する。いかなる知も知自身とは異なるものを把握しない。これは以下の saṃvedana 論証における所証に等しい。

TS_B 2032: saṃvedanam idaṃ sarvaṃ na cārthāntaragocaram/ saṃvedanasvabhāvatvāt svātmasaṃvedanaṃ yathā// [論証式] [主張] この一切の認識は〔自己とは〕異なる対象を対象としない。[証因] 認識を本質とするから。[喩例] 自己の認識のように。

3. Ś によれば、Dh による二種の有形象知識論論証は D を批判する Ku への端的な回答として位置づけられる。Ś は各論証を巧みに再構成することにより、対象とその知の不異性を証明する sahopalambhaniyama 論証が両者の別異性の論証を、知の外界認識を否定する saṃvedana 論証が知の自己認識を否定する論証を各々前提としていることを明確にした。

1) PVin I 43, 4: saty api bāhye 'rthe sahopalambhavedanābhyāṃ bhāsamānasya nilādes tatsaṃvidas cāvivekaḥ siddhaḥ/ sahopalambhaniyama 論証と saṃvedana 論証が「〔知の〕有形象性の証明」(sākāratāsiddhi TSP_B 695, 14) と呼ばれることに倣い、本稿では両論証を「有形象知識論論証」と名付ける。 2) sahopalambhaniyama 論証成立の背景に関して、Iwata (1991: 20-24) はそれがどの程度『観所縁論』に遡及し得るかを検討している。

(86) 『撰真实論』にみる有形象知識論論証成立の背景 (松 岡)

また, Taber (2010) は同論証の要素が ŚNV 章の前主張に見出されることを指摘するが, ŚV ŚNV 172cd-77ab には注目していない. 3) ŚV; atha TS. 4) ŚV_M ŚV_T TS; bhāsakaṃ ŚV_{Ch}. 5) TS; rūpaṃ ŚV. 6) ŚV_M; °kāc caivaṃ ŚV_T TS; °kāc caiva ŚV_{Ch}. 7) ŚV; °kādivat TS. 8) TS; cājñā° ŚV_M; vijñā° ŚV_T ŚV_{Ch}. 9) ŚV_T TS; grāhyavat p° ŚV_M; grāhyatvaṃ p° ŚV_{Ch}. 10) ŚV_M TS; dvivā° ŚV_T ŚV_{Ch}. 11) Kā 163, 12: itaretaraparāmarśa itaretarāparāmarśāt. 12) NR 316, 15: rūparasavat. 13) TSP_B 705, 16: yadvat tasya caitrajñānodbhūtajñānāmśasya maitrādidehāntarodbhavaṃ jñānam/. 14) TṬ 282, 10: nilam idam iti bhedopalambhanād iti hetuḥ/. 15) em. de nyid T; tad atra J Pa G B. 16) TSP_B 671, 24: iḍṛśa evācāryiye sahopalambhaniyamād ityādaḥ prayoge hetvartho 'bhipretaḥ/ 17) J, 'di ltar . . . na T; yathā B; n.e. Pa G.

〈略号及び文献〉

ĀP *Ālambanaparīkṣā*: E. Frauwallner. "Dignāgas Ālambanaparīkṣā. Text, Übersetzung und Erläuterungen." *Wiener Zeitschrift für des Kundes Morgenlandes* 37 (1930): 174–94. **Iwata, Takashi**. *Sahopalambhaniyama*. Stuttgart: F. Steiner, 1991. **Kā** *Kāśikā: The Mīmāṃsāśloka-vārttika with the Commentary Kāśikā of Sucaritamīśra*. Ed. K. Sāmbaśiva Śāstri, Trivandrum: CBH, 1926/29/43. **NR** *Nyāyaratnākara: Mīmāṃsāśloka-vārttikam*. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1898–99. **PS I** *Pramāṇasamuccaya*, ch. 1: Ed. E. Steinkellner. http://ikga.oeaw.ac.at/Mat/dignaga_PS_1.pdf. **PVin I** *Pramāṇaviniścaya*, ch. 1: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya chapters 1 and 2*. Ed. E. Steinkellner. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2007. **ŚV_T** *Śloka-vārttika*: See Kā. **ŚV_M** See TṬ. **ŚV_{Ch}** See NR. **T** Tibetan trans. (D = P). **Taber, John**. "Kumārila's Buddhist." *Journal of Indian Philosophy* 38 (2010): 279–96. **TS_B, B** *Tattvasaṅgraha: Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary "Pañjikā" of Shri Kamalaśīla*. Ed. S. Śāstri. Varanasi: Bauddha Bharati, 1968. **TSP_B, B** *Tattvasaṅgrahapañjikā*: See TS_B, B. **TS/P_D, D** D nos. 4266/67. **TS/P_G, G** *Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Ed. E. Kṛṣṇācārya. 2 vols. Baroda: Oriental Institute, 1926. **TS/P_J, J** Jaisalmer MSs nos. 377/78. **TS/P_P, P** P nos. 5764/65. **TS/P_{Pa}, Pa** Pāṭha MSs nos. 6679/80. **TṬ** *Tātparyāṭikā: Śloka-vārttikavyākhyā Tātparyāṭikā of Uṃveka Bhaṭṭa*. Ed. S. K. Rāmanātha Śāstri. Madras: University of Madras, 1971.

(平成 25 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部)

〈キーワード〉 シャーンタラクシタ, クマーリラ, sahopalambhaniyama, saṃvedana
(日本学術振興会特別研究員 PD)